地域との関わりでできた支援の輪

厚木精華園 地域生活支援課 鴨井 知香
社会福祉法人敬和会
厚木市荻野地域包括支援センター 篠原 千代

1. はじめに

厚木市荻野地域包括支援センターは地域で暮らしている高齢者支援をしている。厚木精華園地域生活支援課は地域で暮らす障がい者の支援をしていて私達は他職種ではあるが「地域での暮らしを支えていく」と言う同じテーマを持っている。事務所は同じ建物の中にあり、日ごろから職員同士の交流がある。

厚木精華園ゆめホーム事業は 6 つのグループホームを運営しており、年齢は30歳から90歳と幅が広く、28名の入居者のうち65歳以上の方が12名いる。高齢に伴う身体機能低下や歩行の不安定、1 人で入浴することに不安がある方が増えており、介護保険の相談や代行申請を荻野地域包括支援センターと連携し、介護保険と障がいサービスを併用し、より良い生活環境を整えながらグループホームで生活している。

荻野地域包括支援センターは健康、生活、財産、権利などを守るために置かれている相談窓口で、誰もが利用できる機関であり、厚木市から社会福祉法人敬和会に業務委託され運営している。厚木市の高齢化率が 26%に対し荻野地区は 29%であるが、1977 年に入居が始まった地域や団地では 30%の高齢化率になっている。地域包括支援センターは相談、介護予防マネジメント、権利擁護、包括的・継続的マネジメントの 4 つの業務を行い、高齢者にとって暮らしやすい地域にするため、地域全体の医療・保健・介護分野の専門家から地域住民まで幅広いネットワークをつくり、地域で暮らす高齢者の課題解決や調整を行っている。

2. 多種職連携の経緯

利用者と日ごろからの会話の中で「畑作業をやりたい」「土を触りたい」と声が聞かれた。そこで、プランター菜園を試みるが職員も初めての経験と知識不足のためか育たない、腐る、枯れると失敗が続く。収穫の楽しみを味わいたかった利用者は水やりを忘れ、だんだんとプランター栽培に目がいかなくなってしまった。野菜を育てる経験が少ない職員にとっても畑のプロに頼れないか、どうすれば利用者が希望する作業ができるかと悩んでいた。

ちょうどそのころ、地域包括支援センターでは認知症サポーター養成講座を開催し、さらに学びたい、地域で何かをしたいという方を集め「おぎのオレンジャー会」を発足する。その中で参加者から、畑が大好きな祖父が認知症で鎌を置き忘れたり、耕運機をひとりで動かし、ひっくり返る。家族がずっと見ているのは大変と意見があった。すると別の参加者から、祖父に畑の師匠になってもらいみんなで畑をやろう、認知症があってもなくてもみんなと一緒なら楽しいのではないかと盛り上がり、「オレンジ(認知症)カフェふぁーむ まさおさん」が結成された。

オレンジカフェふぁーむ まさおさんの結成が決まり、地域での生活を支えている同じテーマと日ごろからの悩みを共有していた厚木精華園地域生活支援課へ解決の糸口になるのではないかと思い、チラシを渡し情報提供を行った。

地域包括支援センターからもらったチラシは、まさに地域生活支援課職員の悩みを解決す

る最善の一手と感じ、利用者へ情報提供するとともに意思確認を行い、参加に向けての調整を開始する。職員だけで解決できなかったことが、地域包括支援センターと連携することで道筋ができたことは利用者と職員にとって大きな一歩となった。

3. 地域活動への参加

オレンジカフェふぁーむ まさおさんの活動は２回/月、第１•３木曜日に実施され、参加に向けての調整を行う。活動は収穫作業だけでなく、鍬を使用して畑一面の土ならしや鎌を使用して真夏の雑草抜き、サツマイモの苗を植えたりと畑のノウハウも学びながら、収穫の喜びを知る。活動にはグループホームの利用者だけではなく、生活課の利用者も参加され、昼食も含めた交流も地域住民と行うことができた。

しかし楽しむ以外にもトラブルが起きることもあった。当日参加に乗り気ではなかった利用者がベンチに休んでいる所に認知症のまさおさんが来られ、作業をやらないなら帰れと怒られ参加10分で帰ることもあった。利用者にとっては新しい活動場所、初めての方と接することに抵抗がある方もいて、職員の傍から離れず緊張している様子があった。しかし畑作業の経験があり「鎌の使い方が上手で慣れた手つきで作業している。」と地域住民から褒められると自信がついたのか職員の傍から離れ、地域の方と会話をしながら畑作業を楽しんでいた。サツマイモの収穫時に芋よりも芋づるがほしいと利用者が希望され、地域住民は理由がわからずクエッションマークがついていた。利用者から地域の方へ芋づるの煮物の作り方や味付けのやり方を伝えているその姿はとても誇らしく感じた。

夏には「ひまわり大作戦」と称して、ふぁーむ まさおさんのメンバー、利用者、地域住民、高齢者、高齢施設の利用者、保育園園児が加わり、畑一面にひまわりを植える。種まきで利用者が隣になった保育園園児が次の工程に進んでいないことに気づくと、利用者が自然と「ここにおいで」と言い園児にそっと手を差し伸べていた。子どもと接する機会や経験が今まで少なかったが、子ども達と接することで新たなやさしさの一面を見ることができた。

4. 活動成果について

利用者のニーズに応え、プランター栽培では味わうことができない作物を収穫する喜びを一緒に体験することができたこと、身近な場所で新しい出会いが生まれたこと、利用者が地域の中で活躍できる居場所の確保ができたことで、利用者を支える支援の輪がさらに繋がり、広げることができた。

その後、ふぁーむ まさおさんの活動に参加している地域住民の方の入居相談が地域包括支援センターから入る。50代男性で若年性認知症と診断されていた。厚木精華園グループホームでは知的、精神、身体障がい以外の入居相談は初めてのケースであり、認知症と向き合う専門的知識が不足していたため、受け入れに前向きにはなれなかった。多種職の検討チームに地域生活支援課が加わり、話し合いの場に参加する。本人もグループホームの体験入居に前向きになり、本人にとって必要な支援とは何か模索と検討をしていた。話し合いの場以外でも、参考書を読んでもわからないことや不安事は地域包括支援センターへ相談しアドバイスを受けたり、入居前に居室となる部屋の環境整備を一緒に行った、多種職の検討チームが明確なアドバイスやフォローがあり、利用者だけでなく、私達職員も支えて頂いた。多種職連携は入居後の現在も継続している。

5.　今後にむけて

利用者を支える支援の輪を継続しながら広げていくために「地域活動へ継続的な参加をしていく」ことが今後も鍵となってくる。しかし、通常業務も行いながら一大プロジェクトを行うには地域生活支援課の常勤だけでは限界があり、利用者のニーズに応えることが難しい。今回、オレンジカフェふぁーむ　まさおさんの活動に継続的に参加し、地域の資源や活動に入ることで利用者も職員も無理がなく、楽しく活動に取り組むことができている。また、多種職が連携することで、地域ネットワークや支援の輪の構築に成功することができた。今後も荻野包括支援センターとの連携を強化し、共に歩んでいく。